

第1回全国同人雑誌賞 発表

本年四月に発足しました全国同人雑誌協会主催により、全国の同人雑誌の活動を称揚、奨励する目的で、全国同人雑誌賞が新設されました。これは六回ですすでに終了した徳島県三好市の富士正晴同人雑誌賞を継承するものであると同時に、日本文学の基盤である同人雑誌の創作と表現活動にもっと光を当て、文芸創造エネルギーを鼓舞し、自主表現を喚起する方向に運営される賞です。

この全国同人雑誌賞の第一回の選考が八月一五日終戦記念日に、選考委員勝又浩氏、岳真也氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の三名により、行なわれました。
選考結果は左記の通りになりましたので、ここに謹んで選評とともに発表させていただきます。

授賞式は第一回全国同人雑誌協会総会・第四回全国同人雑誌会議の場で、行なわれます。

(全国同人雑誌協会)

大賞

「北斗」 (愛知県)

主宰 竹中 忍

奨励賞

「たまゆら」 (京都府)

主宰 中川 一之

「南風」 (福岡県)

主宰 和田信子

特別賞

「文芸復興」 (東京都)

主宰 丸山修身

「仙台文学」 (宮城県)

主宰 牛島富美二

ニューウェーブ 新同人雑誌賞

「文芸エム」 (滋賀県)

主宰 原 浩一郎

ニューウェーブ 新同人雑誌優秀賞

「前衛アンソロジー」 (愛知県)

主宰 松原礼二

選評

選考会後の感想

勝又 浩

「北斗」（愛知県）は、ちょうど今回の審査資料の一つとなった六七五号（令和三年三月）に、現発行人・竹中忍の回想文「遠近『北斗』と清水信」を載せている。それによれば、創刊は昭和二十四年、まだ市街のあちこちに戦傷の跡が残っていた時代であるが、以来、月刊を守って既に七二年ということになる。その創刊時の四人の一人が清水信。平成二七年に九三歳で亡くなられたが、愛知県、あるいは近畿地方全体の同人雑誌、ひいては地域文化を牽引してきた一人である。野に遺賢ありというが、同人雑誌界ではこうした隠れた文化人が各地にいて、たとえば九州の北川莊平、関西の竹内和夫などがすぐ思い浮かぶ。こうした人たちによって地域の文学が育まれ、守られてきたが、そうしたあり方の代表的、象徴的な存在が「Viking」（現在八四七号）を創刊した富士正晴に他ならない。「北斗」を創刊した同人たちは印刷費を浮かすために中古の活版印刷機を買ったところから始めた、そんなエピソードがある。そ

うした手作りの同人雑誌精神を今なお強く保持しているのが「北斗」である。それぞれが、作品個々の良しあしとは別の、ためにする仕事ではなく、好きから始まった、書くことと生きることが一体になった人たちの仕事、そして、そこから来る徹底した外野精神だと言えよであろうか。そういう人たちの個性の明確な仕事が続いて見える雑誌である。「大賞」として推挙したゆえである。

次に「特別賞」として、候補誌のなかから「文芸復興」（東京都）と「仙台文学」（仙台市）の二誌を推した。「大賞」「一誌の他に「特別賞」として二誌選ぶのが三好市「全国同人雑誌賞」の慣例であったが、そのかたちを新しい同人雑誌賞も踏襲することになった。しかし、何をもう一つ「特別」とするのか、実は三好市の時代から曖昧であった。今回、当然その点の議論も出たが、あまり厳密に規定してしまうより、要するに何らかの個性、特色を持つ雑誌を選ぶという程度の約束でおく方が、雑誌を幅広くピックアップできるのではないかと趣旨に落ち着いた。

「文芸復興」は、今回の参考資料となった第一四一号に、発行人・堀江朋子が「『文芸復興』の歴史と紹介」を載せているが、創刊は昭和一七年である。プロレタリア文学の詩人・作家として活動もしていた上野壯夫らによって起こされた。その後、国家による同人雑誌の統廃合などの統制を受けた中断期もあるが、戦後は昭和三十一年に第二次とし

て復刊、それが平成八年に第百号を迎えたところで代表を務めていた落合茂が急逝、再度休刊に入る。その後、平成一一年、第三次復刊を果たして現在に至っている。多才な作家である現在の発行人堀江朋子は創刊者上野壯夫の娘である。ところが、この一月、急逝して最新の二四二号は彼女の追悼号となった。発行人は丸山修身に引き継がれたが、この賞が、ささやかながら前発行者への追悼と、新出発同人への励ましになれば嬉しいことである。

「仙台文学」は、誌名に地名を掲げた、同人雑誌の一つの典型的なあり方を示している。会員も市内在住者に集中している。また、この夏、「同人雑誌優秀作」として「文芸思潮」に転載された渡辺光昭「狐火」は、もと本誌の九五、九六号に載った「キツネビ」である。つまりこの地方の方言であるが、そうした地方性がよく活かされた作品である点も同人雑誌のよき特色を示している。蛇足すれば、本誌は昭和三九年、前回のオリニピックの年の創刊であることも一つの時代を象徴しているであろう。最近の編集後記は会員の高齢化を嘆く文章が目立つが、そのあたりは今、全国の同人雑誌が直面する共通の問題でもある。こうした問題を、地域に根差しながらどう乗り越えて行くか、これからの活動を期待したいが、この賞が幾分でもその展開の弾みとなれば何よりだ。

「新同人雑誌賞」は、候補誌として二誌があげられた。し

かしどちらとも、個々の作家作品についてはともかく、運営の仕方を含めた雑誌としての在り方が、基本的に同人雑誌の範疇に入らないと、私には思われた。ただ、この賞の趣旨は三好市のときにはなかった、新しい試みへの奨励であるから、従来の概念に当てはまらないというだけで外してしまうのは正しくないだろう。結論は他の二人の意見に従うこととした。

「奨励賞」の「たまゆら」（京都市）、「南風」（福岡市）については、いずれ改めて詳しく紹介するときがあるだろう。

賞の基準と方針

五十嵐 勉

「全国同人雑誌賞」の第一回である。どんなスタートになるか、今後の賞の性格も決まる気がして、責任を覚えつつ選考会に臨んだ。

雑誌に対する賞は、一つの作品に対する賞とは異なる。そもそも何を基準に考えればいいのか、基準や方針があるべきだろう。それはまず、各誌への討議に入る前に問題になり、結局「いかに持続しているか」「現在も内容が充実しているか」の二点をしっかり押さえることが明確にされた。それに加えて勝又選考委員が「同人雑誌」にはそれと

は別に活動として評価すべきものと示唆し、雑誌作りとは別に、いかに合評会などをしっかり行ない、練磨の場をグループとして維持しているか、鍛える文章道場としての役割も選考に反映すべきだとの意見に賛同した。

その継続力に加えて、現在日本で月刊を維持している同人誌はきわめて少なく、熊本県の「詩と真実」と今回候補に上がってきたこの愛知県「北斗」しか思い浮かばない。

「北斗」はその貴重な月刊同人誌の一つである点がまず評価された。六七九号はとてつもない継続である。またその長い歴史のなかで「北斗」の初期主宰者は、活字と印刷機を自ら買い、一字一字活字を拾って本を印刷していたという涙ぐましい努力と姿勢も振り返られた。「現在の内容の充実」については、第三回のまほろば賞に大西亮氏の「カプセル タイム」が選ばれていることが加味された。特に勝又選考委員が評価したのは、きちんと集まって合評会を重ねていることで、同人雑誌の伝統的役割をよく果たしていると称賛した。私は主宰者の竹中忍氏が清水信氏の追悼講演会で話した内容に、同人誌の覚悟と姿勢がよく表れていることに注目した。これは他の同人雑誌の方々の参考にもなると思われるので、今号の誌面にも転載させてもらうことにした。それらを総合して、「北斗」が第一回の「同人雑誌大賞」にふさわしいと決定した。ただ、今後のこととして少し注文をしたいのは、月刊で追われるせいか、一

た最近急逝した前主宰者の堀江朋子氏の情熱も前々号までには漲っており、それを受け継いだ新主宰者にも深い位置での覚悟が感じられて、好感を抱いた。

もう一つの特別賞は東北の雄とも言える「仙台文学」に輝いた。地味だが、東北の風土を感じさせる粘り強い継続と、これまで「まほろば賞」を受賞した作品もあり、今年また「狐火」と言う作品で渡辺光昭同人が「まほろば賞特別賞」を受賞していることが、支持を得た。主宰者の苦勞が、誌面にも滲み出ていて、それが同人誌の実直な味になっており、地方ならではの深い根を感じさせる。

継続の長さから言うとう京都の「たまゆら」の方が長く、一二〇号で、岳選考委員はこちらを強く推し、オープンな立場から、雑誌の作りも含めて「たまゆら」を高く評価した。前主宰者の佐々木国広氏の文学への情熱が迸っている点を、「文芸の熱気」として買い、また昨年の「まほろば賞」桑山靖子氏の「当麻曼陀羅」などいい小説作品がこの誌には多いということを強調された。甲乙つけ難く、並んでいるようにも感じられたが、「たまゆら」は若い新主宰者に引き継がれ、今後も長く期待できることから、新たな機会もあるのではと先送りのような形から奨励賞に甘んじてもらった。新主宰者に期待している。

九州の「南風」は、いつもコンスタントに高いレベルの作品を集めている。手を抜いた作品がない。これだけ手堅

つ一つの作品がやや小さくまとまりがちで、ボリュームと重みのある作品がこのところ影を潜めている。年に一度くらいは量感を意識したしっかりした作品を期待したい。あと、雑誌の作り方として、各ページに小さなタイトルをつける柱がほしい。どの作品のページなのかわかりやすくなるからである。これは「北斗」に限らず、多くの同人誌に希望したい。さらに多くの誌に見られる柱は本来ページの上にあるべきで、下のページを表す数字に隣接しているのは不備である。これは商業文芸誌の「文学界」が、レイアウトデザイナーの新奇を銜うアイデアを採用した結果、これが本来の形という誤解を生み、みな悪い方向へ倣ってしまった。悪い権威には従うべきではないだろう。

特別賞は、富士正晴同人雑誌賞を結果的に踏襲する形になったが、やはりいい雑誌を認め、称揚するという目的のためには、存続するべきということになった。大賞とは別な観点から評価すべきものがあるし、意義深い同人雑誌の姿はそれぞれの姿としてしっかり汲み取っていくべきだろうという点は確認し合った。

「文芸復興」は戦前からのプロレタリア文学の流れを汲む伝統ある雑誌で、一四二号という歴史といい、中身の濃い充実ぶりといい、賞賛せずにはいられない重みがある。この誌の鎌倉期を素材にした作品や評論の造詣の深さには感服するし、学識に根を張った格式の高さには脱帽する。ま

くハイレベルの作品を出し続けるのは、容易なことではない。いかに合評会が充実しているか、切磋琢磨しているか、文章のしっかりした整いを見るだけでも窺われる。以前和田信子氏が「ミッドナイト・コール」でまほろば賞を受賞しており、紺野夏子氏も何度も優秀賞など受賞している。安定したレベル継続は注目すべきだが、今回はどれもみな受賞しておかしくない厳しいコンテストとなったため、泣いてもらった。内容の良さ、充実度は、選考委員全員が認めていた。

今回全国同人雑誌賞の新機軸として最近創刊された同人誌を新人同人誌——「新同人雑誌賞」として称揚することが打ち出された。「三号雑誌」として消えていく場合が多い中でも、同人雑誌を立ち上げたいへんさを含めて、歓迎奨励をすることも重要ではないかという勝又選考員の提案を受けての新設置である。高齢化に悩む同人雑誌が多い今、こうした領域に新たな門戸を開くことは刺激になるかもしれないと大いに賛同した。

二誌の候補にしばらくをえなかったものの、これに該当しそうな新人同人雑誌は少なくない。関西には特にこの新興同人雑誌が多い。また次回に機会を持ちたいと期待しつつ、今回は「文芸エム」と「前衛アンソロジー」に的を絞らせてもらった。

「文芸エム」はすでに四号を重ねていて、その志は高いも

のがある。小説だけでなく、評論も優れた作品がある。荒削りな、何でも表現しようとする無鉄砲な意気込みがあり、それが逆に熱気の迸りとなって、壮んさを感じさせる。起爆力がある。これを買って新同人雑誌賞に推した。

「前衛アンソロジー」は「前衛」を標榜する唯一の誌である。完成度を問うよりも、何よりもその心意気がいい。無茶苦茶なことに懸け、常識を破ろうとすること、危うさをもとめせずあえて挑戦すること、その気迫が光を放っている。こういう挑戦を長く持続することは、確かに難しい。しかしだからこそ反逆を込めて打って出ようとするその心意気がいい。挫折や敗北を恐れず、立ち向かう果敢さに共感した。たいへんだが、もう一号でも二号でも、続けてほしい。エールを込めて称揚したい。

本来もつと推薦制度を確立したり、予備選考を重ねたり、準備に時間をかけるべきということはわかっていたが、総会までに第一回は決定したいという事情から、やや急がざるをえなかった。それは大いに反省している。しかし普段から同人か雑誌に目を通し、よくがんばっている努力と情熱は見落とさなかったつもりである。

とにかくスタートした全国同人雑誌賞だが、不思議に手応えがある。作り手にとつての文芸、創作の表現としての文芸、商業主義に毒されない真の文芸の道がここに開かれていると思う。

いことですよ。内容的にも、優れた作品がいくつか眼に止まりました。

【仙台文学】誌名からも分かるように、「仙台」とその近辺に在住の方々が発行されている雑誌ですね。なるほど、よく纏まっている感じがです。逆に言う、いまいし突き抜けたものが欲しいかな、との思いも残ります。

以上の五冊に関しては、いずれアヤマかカキツバタ……優劣つけがたし、というのが全体的な私の感想です。ただし、それぞれの雑誌の成り立ちや特徴を知らない、いわば「素人」の眼には、揚げた順かな、と映りました。

その程度ですので、勝又、五十嵐の両先生が【北斗】を大賞に推す、と仰るのなら、まったく異論はありません。今年令和三年の七・八月号のような「合併号」も幾度かあったようですが、それが「第六七九号」であるのを知って、心底びっくりし、腰を抜かしそうになりました。

私など、いくらか名の知れた「蒼い共和国」「えん」「二十一世紀文学」のほか、一号雑誌、三号雑誌も含めれば八冊か、九冊の同人誌を主宰してきましたが、惜しむらくは、いちばん長くても十一号でストップです。「持続は力なり」ですよ、ほんと。

新しく発行された二誌、【文芸エム】と【前衛アンソロジー】（創刊号の誌名（書名）は【何度でも何度でも新しい小説のために 前衛アンソロジー】）に関して

「持続は力なり」

岳 真也

まずは、候補作となったすべての同人雑誌に目を通させていただいたうえでの感想を、一誌ごと、一言か二言ずつ、申し上げておきます。

【たまゆら】私がいづつかの作品とか論評などを読ませていただいたところ、内容の濃いものが多いと感じました。作りは正直、少々雑かな、という印象を覚えましたが、表紙などは悪くありません。

【南風】よくあるタイプの同人誌ではあるのですが、デザインなどの何だの、しっかりとしています。挿画もあって、印刷も良い。手に取りやすく、文芸に興味のない人にも読みやすい作りです。

【文芸復興】総合力という点では、一番でしょう。内容にしても、表紙、目次などの作りにしても。古くから（戦前から？）続いている——「伝統」が感じられ、読み応えのある作品も少なくありません。

【北斗】とにかくにも、毎月発行しているという事実！かつての私のように、一号一冊出すのにも、ヒーヒー悲鳴を上げていた身には、すごいことだと頭を下げさせられます。その分、薄くなってしまうのですが、仕方のな

は、それこそは「持続してほしい」と、奨励の言葉をお贈りするしかありません。

「いずれアヤマか……」とはまるで反対で、前者はある意味、これまでの同人雑誌の形態をそっくり受けついだという印象があり。後者は「何が何でもハミ出てやるっ」との感じ。桜や菊とタリアくらの差があります。

【前衛アンソロジー】は、中身の作品はもちろん、各作品のタイトルやペンネームまで異色のものが多い。しかし、「宣言文」の冒頭に夢野久作やマルキ・ド・サド、アントナン・アルトンの名が出てきたりして、「ありゃっ」と思いました。若かりし頃、私たちがヤンチャで「前衛」を取り、追いかけていた時分に、よく口にしていた名前ですからね。まあ、伝統ある前衛……を指すのも、面白いかもしれません。

でも、こういうのは、まさしく「持続」が難しいのですよ。それらのこと、一切を考慮してみると、ある意味、地味な【北斗】を大賞にするのは正解のような気がします。

*私の同人雑誌観や各誌を主宰していた体験談、今後の同人誌の在り方などについては、「座談」のほうでお読みください。

全国同人雑誌賞

大賞

「北斗」

(愛知県)



受賞の言葉 「北斗」主宰 竹中 忍

受賞の連絡を受けた時の同人は一樣に戸惑いあるいは困惑し、私は他の清新な雑誌に回したら、とすら考えた。それほど皆は一般的な栄典から遠く離れた地で仕事をしていた訳だ。しかし、識見ある選考委員の厳正なる審査の結果は素直に受け入れて、今の仲間と物故した同人たちへのエールと思う。

発足したばかりの全国同人雑誌協会が設けた賞が、今後順送りや内々での談合もどきで決められて失墜してはなるまい。むしろ、全国の同人雑誌の目標となる威厳ある賞に育てるべく、私たちは自覚を新たに作品と雑誌の充実に努めたい。そう、あんな雑誌もなかった賞か、と思われぬように。

「北斗」代表として煩雑、膨大な仕事をこなす協会事務局と選考委員の方々に心からの感謝を捧げる。

「北斗」の横顔

他と取り替えられない人と同じく、どの同人雑誌にも個性がある。推して考えれば、人はみな体格や、性格が違うように、作品もそれぞれ異なる。だから私は、五輪ならぬ政府とIOCと米国NBCによる三輪の祭典で金、銀、銅、一番、二番と順位付けするのではなく、同人雑誌と掲載する作品の巧拙を問わずに個々の違いを尊重する。特に、仲間で手分けして文章をコピーし、紙を折り、ホチキスで止めた素朴な本にこそ同人雑誌の本音があると思えてならない。では、「北斗」はどんな横顔なのか、いささかいびつでひびの入った鏡を見てご紹介しよう。

まず、誌是は「作品を自由に発表できる自分たちの雑誌を持つ。同人の友情を何より大切にする」の二点である。一番目の誓いは、一九四九（昭和二十四）年九月に創刊した四人の同人の誰もが、戦時下軍政の雑誌統合で作品を発表する機会をわずしか得られず、自分たちの雑誌を持つ夢を抱いたからだ。もう一つは、戦争に熱狂した国民が敗戦後に過去を総括することなく民主主義に熱狂する姿を目の当たりにしてこれでは駄目だ、今後は信頼する仲間の友情を信じて歩んでいこうと覚悟を決めたからである。従って、独特の反骨精神がある。

木全圓壽を主宰として清水信、井澤純、川嶋學の四人は、第一次世界大戦後にバリ近郊のクレティエで共同生活して清新な作品を書き、自分たちで活字を拾って本にしたジュール・ロマ

「北斗」

ン、シャルル・ヴィルドラック、ジョルジュ・デュアメルらのアベイ（僧院）派を手本とした。資金を拠出して中古の印刷機と七万本の鉛活字を購入し、手の空いた時に印刷機を据えた木全の家に寄って雑誌を印刷した。

清水は一九六二（昭和三七）年に第三回近代文学賞を受賞したものの、大手出版社の「もう少しお手柔らかに」との原稿の訂正依頼に決して首を振らず、少し後に木全は平野謙から芥川賞に推され「同人を見捨てて自分一人がいい目を見る訳にはいかない」と答えて辞退した。そして二人ともに東京へ出ることなく、地元で黙々として仕事をした。

小説を主体とした月刊同人雑誌としてこの九月で六八〇号を刊行した。では、順調であったかと言えばさにあらず、危機の連続だった。特に、一九九三（平成五）年に木全が脳梗塞で倒れた時には同人・会員の継続意志が強く、木全早苗夫人を二代目主宰として何とかバトンを繋いだものの六年後に心筋梗塞で急逝し、臨時総会で吉田栄治を三代目主宰、棚橋鏡代を会計、尾関忠雄を渉外、竹中を編集とした。ところが、吉田はすでに病魔に侵されていて二年半余で大腸癌により五二歳の若さで没した。さすがの皆も絶望的になり、他の人も「北斗」は呪われている、次の主宰も雑誌に生命（いのち）を持っていかれる、と口にしたが「呪はば呪え」と毒づいた私が第四代主宰に推され、今日まだ生きている。私たちはまた、雑誌の雑にもこだわる。小説、詩、評論、

エッセイ、短歌、アフォリズムなど多彩であり、進歩主義や保守主義思想を持つ人、古典宗教や新興宗教信仰あるいはアナキストも包摂してなお侃侃諤諤（かんかんげつがく）ではなく和気あいあいと合評するのも誌是の一つである。単一性や全体主義に反する民主主義、自由主義の擁護であり、雑多、今様で言う多様性の尊重だ。拳を振り上げての獅子吼や熱弁をふるうのではなく、只管（ひたすら）に雑誌を発行する道筋の遥かさで証明する実践主義だろうから、個性というものは確かにある。

ただし、マンネリズムに墮し、先輩風を吹かせて自閉する愚は大いに警戒する。毎月の例会冒頭で全員が三〇分ほどの編集会議をしてから、各作品をそれぞれの視点で評価する。よほどの新人にはここが良いとか悪いとかの初歩的な指摘、指導はするが、それより私たちは各自が持つ独特な視点に驚き、新鮮な発見をして自分のものになしようと試みる、全員が先生であり生徒の学校だ。私は、それで良いと信じている。

かつて雑誌は賞を受け、同人たちも様々な賞を得たけれど、誰もがこちらからアブローチせず、思いもかけない方面から声をかけてもらったに過ぎない。また、雑誌を通して最良の人たちの知己を得た。その人たちもまた、自己宣伝や自己陶醉とは遥か縁遠い所で着実な仕事に励むので、私たちとどこか相通じるのかもしれない。志ある他の同人雑誌との交友は宝である。

（竹中 忍）

鈴鹿文化祭 講演録

遠近「北斗」と清水信

竹中 忍

お集まりいただいた、清水さんにゆかりのある、また興味をお持ちの方は、友人や同士とも思われますので、フランクにお話しさせて頂きます。

「北斗」は一九四九年、昭和二十四年九月一日に創刊しました。メンバーは木全圓壽、清水信、井澤純、川嶋學の四名で、すぐに羽柴和夫、橋本秀男らが参加しました。小説を主体とした月刊同人雑誌としてこの一月で六七二号に達しました（二〇二一年八月で六八〇号）。

私が清水さんに出会うまでの経緯をお話しさせていただきます。不器用なたちで、幼い頃から団体行動が苦手というよりは、出来ませんでした。運動会の行進では歩調が合わせられず、今でも歌に合わせて手拍子をすればずれてしまします。小学生の頃から家にあった月刊誌や週刊誌を読み漁り、自我ができるまでと義務教育に敵愾心を燃やしました。以降、中学・高校の学校図書館にある本ばかり読んで詩、短歌、俳句を作り、最後に小説に行き着きました。

高校でも受験勉強を拒否して校内外の仲間と同人雑誌を



*本稿は講演全文ではなく、梗概に留める代わりに、補遺として、時間の都合で語れなかった部分を載せさせていただきます。

「北斗」

だすことに精魂を傾け、四人で「浮遊」という拙い雑誌を
 数号続け、大学では文芸部の副部長兼編集長として月刊雑
 誌を出しました。仲間が就職すると全ては自然消滅し、雑
 誌を交換して知り合った羽柴和夫さんの導きで名古屋の某
 同人雑誌に所属しました。羽柴さんは当時、中日新聞で整
 理部長をしており、極めてユニークな小説を書きましたの
 で「どうして中央へ出ないのですか、十分に売れますよ」
 と尋ねました。すると真顔で「有名になってどうするのだ。
 昔の仲間の木全と、東京と鈴鹿にいる三人の男に読んでも
 らえば良いのだ」と、微笑みました。後に、井澤純さんと
 清水信さんと気づきました。二四、五歳の時に初めて清水
 さんを意識した訳です。「北斗」には昔から、読者三人説
 があります。本当に小説が読める三人だけに評価してもら
 えば良い、との考えですね。

やがて、所属した同人雑誌の、愚か極まる内部分裂に巻
 き込まれて袂を分かつことになりました。文芸を志す強い
 意志と高潔さがあると思っていた、うんと年上の作家たち
 のあまりに低俗な精神に呆れ返ったものです。排除された
 一人の羽柴さんから「古巣の『北斗』にいるので良ければ
 来ないか」と誘われ、喜んで参加しました。一九八一年、
 昭和五六年の七月二八日の夜に、新栄にあった木全圓壽さ
 んのお宅を訪れたのです。心底、驚きましたね。追い求め
 てきた、理想とする同人雑誌がそこにあったのです。

「らん」と、軀をふるわせて怒ったものです。こうした特性
 のある人々が若き清水さんの仲間だったのです。

木全さんから雑誌のバックナンバーを借りて読むと実に
 面白い。ある日、尋きました。

「この人はどうされたのです。亡くなったのか、軀でも壊
 されたのですか。これほど鋭く面白い批評を書き続けた
 ら、今頃は屈指の評論家として名が知れ渡っていますよ」

「清水のことかい。今は鈴鹿にいるよ。清水が、近代文学
 賞を取った時には『月刊新潮』などから原稿依頼が殺到
 したんだ。ところが、あの調子で書いて編集者の修正依頼
 も断るので、あなたの原稿はとも掲載できません、と断
 られたのだ。僕は言ってやったんだ、もう少し編集者の立
 場も考えてやったらどうだ、とね。ところが、そこが清水
 なんだな」と、頼もしそうに笑いました。

訂正に一切、応じないですね。では、どんな文章かと
 いいますと、当時旭日の勢いであつた大江健三郎さんの作
 品を「赤い腰巻小説」と書いたのです。つまり、エロ小説
 に過ぎないと。とても掲載できませんね。東京からの依頼
 は来なくなり、清水さんは同人雑誌でこそ真実が書けると
 の確信を得て、この地、鈴鹿に腰を据えて皆さん方と文芸
 復興に努めたのでしょうか。

創刊メンバーの清水さんは「北斗」を離れたもので、

「北斗」にはお手本がありました。第一次世界大戦後にパ
 リ近郊のクレティエで共同生活して清新な作品を書き、自
 分たちで活字を拾って本にしたジュール・ロマン、シャル
 ル・ヴィルドラック、ジュールジュ・デュアメルらの僧院派
 です。それで、四人の同人が資金を出し合って購入した中
 古の印刷機と七万本の鉛活字を木全邸の奥座敷に据え、手
 の空いた時に集まって活字を拾い雑誌を印刷したのです。
 花田清輝は「羨望の念にたえない」と言いました。

木全さんは診察の合間に時間があれば本を読み、資料を
 蒐集し、黙々と執筆しました。主に忘れられた作家を掘り
 起こして事績を書き留めるのです。郷土文化史研究とかマ
 イナーな作家の紹介とは次元が違い、時代と作家の生命を
 生き生きと蘇らせるのですね。

初歩的な間違いは別にして、先輩風を吹かせて作品の瑕
 疵をあげつらうことはなく、同人の成長を見守るところが
 ありました。「北斗」は即効薬ではなく、漢方薬なのです。
 多くのことを学びました。文芸は教えて教えられるもので
 はなく、盗むというのか自律的主体的につかみ取るしかな
 い訳で、同人は永遠の学徒、学ぶ人であらねばならないの
 です。

新聞作りのプロとしての羽柴さんには、雑誌編集の技術
 について教えられ、それ以上に生きる心構えを学びました。

「俗人のような真似をするな。作家は志を高く持たねばな

お会い出来ずでしたが、木全さんは私に幾度か「君を一度、
 清水に会わせてやりたいんだがな」と、言いました。創刊
 同人たちは別れても互いを認め合い、友情を持ち続けたの
 です。

二〇〇三年、平成一五年の五〇〇号から、清水さんは「北
 斗」に復帰して、以降亡くなるまで同人でした。二〇一二
 年、平成二四年の五八九号（七・八月合併号）に大江健三
 郎論を掲載しますと、大江さんから礼状と自ら梱包した著
 書『定義集』が送られてきましたので、清水さんもわかか
 まりが解けたのでしょうか。もちろん、新しい大江論には「赤
 い腰巻」との表現はありませんでした。

定期刊行の「北斗」は、決して順調に來た訳ではありません。
 せん。それどころか危機の連続で、一九九三年に木全圓壽
 さんが脳梗塞で倒れた時点で廃刊してもおかしくはないの
 です。同人・会員の続けようとの意志が強く、奥さんであ
 る木全早苗さんを二代目主宰にして何とかバトンを繋いだ
 のですが、六年後には心筋梗塞で急逝されます。通夜の帰
 りに臨時総会を開き、今後は若い人でやろうと高校教師の
 吉田栄治さんが三代主宰、棚橋鏡代さんが会計、尾関忠雄
 さんが渉外、そして私が編集になりました。その吉田さん
 が途端に腸閉塞で緊急入院したと聞いてさすがの私も絶望
 的な気分になりました。案の定大腸癌で、しかも若いので

進行が早く二年七か月後に五二歳で亡くなります。自宅に駆け付けて臨終を見届けた同人たちが、帰りに臨時総会を開きました。もう終わりだ、次の主宰者も「北斗」に命を持って行かれる。「北斗」は呪われている、という人もいました。悲愴な雰囲気か漂ったその時、尾関忠雄さんが「呪いは呪え」と吐き捨てていた私に目配せしたのです。お前がやれ、と。そして今に至った訳です。幸いにして私はまだ命を持つて行かれず、ここにこうして立っております。ちゃんと両足もあります。

「北斗」は創刊以来、二つの誓いを堅持しております。作品を自由に発表できる自分たちの雑誌を持つ、同人の友情を何より大切に、ですね。創刊同人たちは皆、戦時中に雑誌統合で発表の自由を奪われましたので、誰もが作品を自由に発表できる自分たちの雑誌を持つ夢を見たのです。そして、人々が戦争の熱狂に、また戦後民主主義の熱狂に囚われる姿に呆れ、信じられるのは四人の友情だけとの確信を持ったのです。

人の生き方はもちろん、どんなものにも本質的な意味、意図があります。私は先に、学校教育に意義を覚え、反発したとお話ししました。給与所得者になっても常に居所なく違和を覚える一方で「北斗」の水は合いました。その隠された意味は何かと考えれば、一貫して自由を求めたことが分かります。それは、お仕着せの学校教育にはなかつ

府を雇うのが我々なのを忘れてはいけませんね。雇用者が雇用主に不当な命令をするとは本末転倒、倒錯です。まあ、政府は私の発言を収集して「好もしからぬ人物リスト」に追加するのでしょうか。

一方、国外ではバイデン大統領が誕生しました。普段はテレビを見ませんが、大統領選挙はどうかと時に覗いたものです。ニュースかショーか朝から晩までやっていて、解説者やコメンテーターとやらが米国選挙をいい加減でレベルが低いなどと散々に批判するので驚きました。学ぶ、との姿勢が微塵もないのですね。先の学会議題も同様で、強権的な政府にも謙虚さがありません。自分の一票を行使して代表をワシントンに送る、民主主義の基本が選挙です。既に、ジュール・ヴェルヌは小説『八〇日間世界一周』で、サンフランシスコの選挙の熱狂ぶりと乱闘騒ぎを面白く書いています。最後に主人公が「市長か上院議員の重要な選挙か」とアメリカ人に尋ねると「治安判事の選挙だ」と教えて呆れたように、伝統なのです。

黒人とアジア系の血を引く女性のカメラ・ハリス副大統領が誕生する国と、地盤・看板・鞆といわれて盛り上がりがない選挙や、首相が談合で生まれる国と大違いです。また、歌手のレディ・ガガさんや多くのハリウッド俳優らがバイデンさんを積極的に応援して、若い人に民主主義と選挙に参加する大切さを教えました。我が国の芸能界ならたちま

たし、社会的な組織にもなく、ただ「北斗」にはあったのです。勿論、犠牲にしたものは実に多くまた困難の連続でした。出世もせず蔵も建ちませんでした。しかし悔いはありません。清水さんは繰り返して自由の大切さについて書いておりますし、物故した仲間たちも富みや榮達、世俗的な名声には一切、価値を認めませんでした。

ここにお見えの中にも同人雑誌を出している方がいらつしやるでしょう。その方たちも、書く孤独や社会的責務を担いながらも小説に自由を求めてひたすらに綴ってみえるのだと思います。そうした人々が、私には同志なのです。

昔話ばかりでは未来がありませんね。では、清水さんが存命でいらしたらどんな発言をされたでしょう。

国内を騒がせているのが日本学術会議会員に推薦された六名を菅総理が認めなかった問題です。何にせよ意味や意図があると先に言いました。そう、政府の集団的自衛権の行使や共謀罪の改悪に反対した学者たちです。首相は、学術会議には国の資金が出ているから監督権があると。では、幼稚園から高校、大学まで補助金が出ていますので学長や教師の監督権があるのか、国が造った道路や橋を通行し、一〇万円の特別定額給付金を得た私たちを奴隷にできるのか。今の政府はいずれ拡大解釈してそうするでしょう。しかし、国の資金とは私たちがいいやいや払う税金であり、政

ち干されるでしょうし、作家たちすら沈黙です。なぜ学ばないのでしょう、なぜ冷笑するのでしょうか、なぜ無関心なのでしょう。そこに生きた知性があるのでしょうか。頭の良

い解説者は知識があり事情に通じるかもしれませんが、不自由で狭い枠のテレビ画面の中で踊っているに過ぎないように見えましたね。

梅檀せんたんより芳しかった才人、学者先生の学問的業績には本を通して恩恵を被り、感謝しております。しかし、本当に影響を受け、感動した人は市井に生きた清水さんたちです。ベストセラーの小説を読んで達者だな、と感心しても、どこまでが作家本人か、手練れの編集者の関与なのか分からないところがありますね。つまり、普通の個人は、力ある者に平身低頭して屈辱をしのび、悲しみ、憤り、悪にすら手を染めて暮らします。体験には現実生活の鉄床かんどこに打ち付けて鍛えた鋼の強さがあり、机上で書いた空論とは違うのです。同人雑誌の作品は編集者が付きますので粗削りで上手いとは言えないがゆえに、個性が強く出て飽きません。宝石という原石、養殖とは違う山深い清流に泳ぐ岩魚、露地栽培の地元伝統野菜でしょうか。価値に優劣はないはず

です。清水さんがいらしたら様々な問題について積極的に発言されたでしょう。先達の仕事をただ崇め、有難がるだけで

「北斗」

はなく、活かし、さらに発展させてこそ真に遺志を継ぐと言えるでしょう。文章は永遠に残り、再読すれば物故した同人もまた仲間となります。先行した清水さんたちの仕事を辱めないよう、私たちも作品を自由に発表できる自分の雑誌を守り、同人の友情を何より大切にして誌歴を重ねたいと思います。

ご静聴ありがとうございます。

（令和二年二月一日 鈴鹿市立図書館視聴覚室）

補遺

創刊時の同人、井澤純さんは一九二五（大正一四）年、東京小石川生まれ。東京帝国大学文学部で川嶋學さんと意気投合します。川嶋さんと木全圓壽さんは愛知第一中学、現旭丘高校での親友です。井澤さんは東京大空襲で愛知県に疎開し、戦後教職に就いた後に文部省へ転じ、学校図書館と道徳教育を担当しました。一九九六（平成八）年没。享年七十一です。

県立豊川東高校では生徒憧れの先生で、文芸部の顧問として部誌を監修しました。一九四九年の夏休みに部員たちが下宿先を訪うと「今度、名古屋の木全圓壽や清水信たちと同人雑誌をだすのだ」と、顔を輝かせたと。一時期「北斗」同人となった渡辺康充さんから卒業生は「果樹園」を刊行し、中断したものの今日も三河地区唯一の小説主体の同

人雑誌として気を吐いています。表紙の誌名はなお井澤さんのデザインを使用しております。

残念ながら、一九六〇年代以降は外的また内的な理由により文芸から遠ざかります。難しいものですね。

物故した同人に津市在住の、大学で司書学を教えた大西亮さんがいます。ある日、例会でこう言いました。

「井澤純さんというのは『北斗』を創刊した二人なのですね。驚いたな。若い頃に司書の免許を取ろうとして井澤さんが作った教科書で勉強した。こんなに難しい本を編むなど、世の中には頭のいい人がいるものだと感じた。井澤さんは文部省の、学校図書館の指導員といった立場で全国を講演して回り、私は名古屋まで出かけて聴講したものです」

来名した夜は木全さんら同人と食事したでしょう。そうした文章を読み、話を聞いた記憶があります。確か、招聘した教育関係者がセットした夕食会を中座して駆け付けたとか。

橋本秀男さんが北斗工房から『愁いなきに似たり』を上梓したので、私たちが先輩たちの反対を押し切って語る会を開催しました。一九八六（昭和六一）年の四月の夕です。木全さんがサブライズとして東京から井澤さんを呼びました。受付をしましたので会場へ案内すると開口一番「清水はどうした、羽柴はなぜ来ん」と、小さく叫んだのを覚えています。清水さんは既に鈴鹿の人で、羽柴さんは親族の

川嶋學さんは、皆さんが日常的に食べる商品を提供する大手食品会社の重役になりました。早くに「文芸と手を切った」と言いましたので、木全さんは「では絶交だ」と返しました。文芸に対する真の厳しさがそこにはありますね。

*補遺は「北斗」六七五（三月）号掲載

北斗

〒460・0026

愛知県名古屋市中区江伊勢山一・三・一

岡文ビル407

棚橋鏡代方

☎052・321・0218

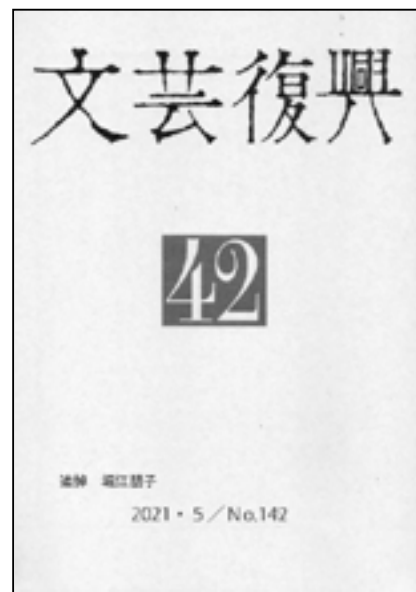


結婚式すら出ない孤高に遊んでいたからです。私は叫びから、初期同人がいかに長く、多分は生涯でしょうが、深い友情で結ばれているかを知りました。互いの才能や生き方を敬し続けたのです。井澤さんも良心的な役人として、学問の至上の集積所であり自由な学びを提供するのが図書館と信じたに違いなく、信を守ろうとする闘いは出世主義とは相容れなかったに違いありません。人生の中盤以降は低迷して哲学書ばかり読んだ、とか書いていました。卑下した文章とするよりも「北斗」同人たち共通の、自由と自律を貫くがゆえの孤独の明晰な認識だったのでしょうか。文章とは怖いものです。小説は勿論、評論でもエッセイでも、読んだ瞬間に書いた人がどれだけの知性を持ち、趣味、感性、社会性、政治的立場、共感力ややさしさ、愛や誠実があるか、つまり裸のその人が分かります。後で取り消そうとしてもできません。私たちはそうと知りながら書きます。暇つぶしや自己満足ではなく、自分の考えや思いを文章によって物語の形にして確認する訳です。良い読み手は同感したり、違うのではないかと疑問を抱いて本と対話します。結論を求め導く論文とは違う無限の問いがあります。作家は生涯を賭して解決のない人と社会を問うのです。清水さんたちはその孤独な道を歩み通したのです。自律した個人であるがゆえに互いを敬し、親友としたのでしょう。

全国同人雑誌賞 特別賞

「文芸復興」

(東京都)



「文芸復興」の志

受賞の言葉 「文芸復興」主宰 丸山修身

文芸復興は来年、創刊八十周年を迎えます。つまり戦前から存在しました。苦難の時代を生き抜いた同人誌なのです。今回の選考基準に「過去の実績と照らし合わせながら選考させていただきたい」とありましたのは、その意味ではとても心強いことでした。

私は過去は距離を長くとって見返すほど、意味と輝きを増すと考えます。この受賞をきっかけに、同人一同、幾多の傑作秀作を生んだ先人の文業を思い、さらなる緊張感をもって精進していく所存です。不特定多数の者に読まれるという意識で書かないと、書き手、特に新人は育っていきません。無視無反応が一番怖いことです。その意味で今回の受賞はこの上ない、力強い励ましとなりました。なんとうれしかったことでしょう。時流に流されない志を大切に、徒手空拳でこつこつと歩みます。地味ではあっても、底光りを放つ誌を創り続けていきたいと思っています。ありがとうございました。



「文芸復興」同人 左から西澤建義、森下征二、堀江朋子、丸山修身

「文芸復興」は、今年一月二日、前代表堀江朋子さんが急逝され、急遽丸山修身が新代表に就くことになった。同人になって十年目である。

同人は現在十三名、三月、九月の締め切りで年二回の発行である。このコロナ禍の間に四人の新人参加があった。ある編集者から、今どきこんな同人誌はありませんよ、と驚かれたものだ。年二回の合評会も中止したために、顔を合わせていない同人が四名もいるのである。それでもそれぞれ力強い作品を寄せてくれたことはありがたい限りであった。

「文芸復興」の歴史については堀江朋子さんが「文芸思潮77号」(二〇二〇年九月発行)で詳しく書いておられる。堀江さんは創刊に深く関わった上野壯夫の次女であったから、この間の裏事情に詳しい。戦前、昭和十七年の創刊であるから、今年で七十九年になる。きびしい戦時下を生き延びるため、何誌かを統合して出発したのであった。

堀江さんは書いている。「商業誌は言うに及ばず、文学同好会、同人雑誌グループの中には、摘発、検挙を受け、廃刊に追い込まれたものも多くあり、統合は時流に押し流されないための自己防衛という側面があった。……きびし

い言論統制下、抵抗は許されなかったが、文学者魂は健在だったことが、「文芸復興」に掲載された作品に垣間見られる」

途中二回の休刊があり、現在は第三次である。長い「文芸復興」の歴史の中で特筆すべきは、上野壮夫と評論家の平野謙との間で交わされた小論争であろう。平野謙は「文芸復興」について、「どうしても文学を断念することのできぬ一種の執念みたいなものから、相当年配の人たちが出している雑誌」（『文学界』昭和三十三年五月）と評した。

これに対して上野壮夫は同人を代表して第二次「文芸復興」誌上で次のように反論した。「売りものにならない小説や詩を書く者がいなければ、強力なマスコミ商業政策の中で文学はだんだん衰え、末枯れてしまうだろう」

今日の文学状況をみると、上野壮夫のこの考えがいかに正鵠を射ていたことか。まさに上野壮夫が危惧した通りになっているではないか。上野壮夫のこの言葉は、以後「文芸復興」の基本精神となった。正式に定めた訳ではないが、不文律のようにこの灯をかかげて歩んできたのである。

平野謙について触れたので、脱線して一言。かつての文芸批評はきびしかった。江藤淳、平野謙、中村光夫、大岡昇平——こんなことを書いていいのか、人格否定ではないか、と思われるような批評も珍しくなかった。これが可能

だったのは文学界全体に底力があつたからである。それが今は、よれよれ。それは批評に如実に顕れる。小説の貧困は批評の貧困でもある。僕は最近、特に批評の方に不振を感じている。心に響いてくるものがない。

「文芸復興」は現在、掲載にあたって身辺雑記は困る、と言っている。これを認めると、レベルの低下に歯止めがかけられないような気がして怖いのだ。『文芸復興』は文芸誌である」という原点は守りたい。

今一番差し迫った問題は同人の高齢化である。十三名中十一名が七十歳以上、八十代半ばの方も何人かおられる。こういう場合、合評会にも気をつかう。若い三十代四十代だったら、多少きびしいことも言える。それを参考にして、新境地を開いてくれるかも知れないからだ。しかし年齢からくる衰えが明らかに現れている作品に対して何と評すべきだろう。長年貢献してくださった方を、とても無下には扱えない。しかし年寄りのお茶飲み会のようににはなりたくないものだ。切磋琢磨、向上心がないとやはりきびしい。幸いなことに、「文芸復興」の場合、年をとってから大きく花開くケースがむしろ多いように僕は感じている。やはり志は大切だと思う。

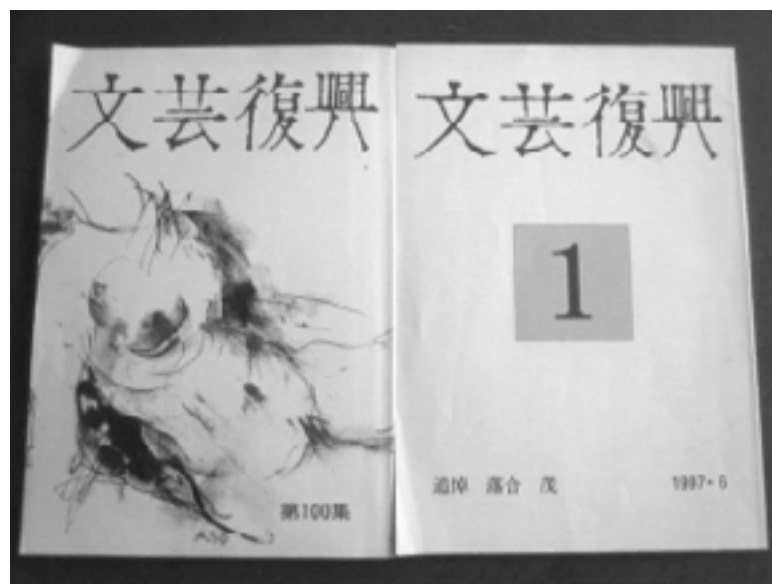
前代表堀江朋子さんは、去年秋、「文芸思潮」に遺言の

ように次のように書いている。『「文芸復興」は、戦中・戦後・昭和という時代とともにあった。そして、平成・令和という時代と共にある。時代は変転していくが、変わらないものがある。時代を超えて美しいもの、人の心を打つものがある。変わらないものを求めて、人は文を著し絵を描く』
不易流行——僕の思いも堀江さんとはほぼこれと変わらない。とにかく良い書き手がほしい。そして若い人は力強く育ってほしい。それが一番強く願うことである。

（丸山修身）



故・堀江朋子氏の著作／「三井財閥とその時代」



文芸復興

〒184・0013

東京都小金井市前原町三・一六・一五・101
文芸復興社 丸山修身方

TEL 042・387・0728

全国同人雑誌賞

特別賞

「仙台文学」

(宮城県)



「仙台文学」の五十八年

このたびは本誌「仙台文学」が「全国同人雑誌賞・特別賞」を戴き、厚く御礼申し上げます。同人・渡辺光昭も「狐火」で「まほろば賞・特別賞」をいただくことになり、重ね重ね御礼申し上げます。有難うございます。

本誌は昭和三十九年（1964）一月創刊なので丸五十七年を経過、来年七月に一〇〇号を迎える予定です。一〇〇号に達することが「特別賞」の意義なのかななどと喜びを噛みしめております。また本誌創刊の昭和三十九年は東京オリンピックの年。その中心人物が故工藤幸一でした。その工藤は「仙台文学の方針」を、「作品本位の同人制」「美しくして妥協せず」「そして書くだけ作るだけ」と七五調で記しています。こうして粘り強く書き続けて来たことへの評価が「特別賞」になったのだと思います。創刊号の同人は一人、現在は一一人ですが、同人達の努力・向上心に深く感謝しています。

今年賞を戴いたことが、創刊の時と重なり、東京オリンピックの年と縁があるんだなあ、などと文学とは無縁の感慨にも浸っています。

受賞の言葉「仙台文学」主宰 牛島富美二 ごとうふみじ



8号表紙裏 合評会後の近くの路上で

「仙台文学」の創刊は昭和三十九年（1964）東京オリンピックの年の一月五日。同人一三名。78ページ。主宰は工藤幸一（筆名・久東鉦二）で、当時新聞社「河北新報」の工務局長だった。当時仙台市内には一〇余種の同人誌があったが、「河北新報」は、こんど百万の文化都市にふさわしい純粋な文学雑誌を、というので創刊されたと紹介している。主宰者の工藤幸一は67号まで主宰して死去。享年八七歳。その後を継いだ牛島富美二が68号を「工藤幸一追悼号」として発行、その表紙裏に工藤の七五調を基調にした「仙台文学とは」を記しているので、掲載する。なお、工藤は創刊号の編集後記で「わたしたちは旗幟鮮明な主義主張を用意しているわけではない」と記している。

この創刊号が当時の文評論家小松伸六に全国紙で取り上げられ、高い評価を受けた一方、大江健三郎のような才能は見い出せなかった、と評された*。

「仙台文学とは」
新鮮にして 重厚に
美しくして 妥協せず
花と小鳥と人間を

「仙台文学」

真実性を 味方にし
オリジナリティを磨くだけ
そして書くだけ 作るだけ
それが仙台文学
作品本位の 同人制
みな同格の結びつき
地方に深く 根をおろし
見果てぬ文学 追いながら
きょう一日を磨くだけ
そして書くだけ 作るだけ
それが仙台文学

9号（1966・11・20）の秋山篤（恵三）「化石の見える崖」、34号（1984・7・10）佐々木邦子「執行猶予」が芥川賞候補になった。ただし、佐々木邦子の「執行猶予」は「卵」と改題されて中央公論に応募、中央公論新人賞を受賞した作品が候補になったものである。秋山（8号・27号まで同人）も佐々木（31号・88号まで同人）も他界している。

なお、工藤幸一は詩人・歌人としても高名で、日本詩人クラブ会員、現代歌人協会会員、歌誌「橄欖」の運営委員・選者も務め、「北東風」短歌社の主宰でもあった。工藤の故郷の山には、歌碑が建っている。詩集に「無人駅」他、

七月一〇日に発行、99号を発行準備中である。来年にはいよいよ100号となる。現在、同人二名。一時は二〇名の同人（20号1973・2）の時期もあった。

「仙台文学」を絶やさないためにも同人、特に若者を募集しているが、なかなか参加してくれないのが大きな悩みである。当時二四歳で参加した牛島富美二はただ一人創刊以来の同人だが、他の同人の多くは他界しており、牛島も八〇歳を超えている。

このたび、「まほろば賞」特別賞を受賞した「狐火」の作者渡辺光昭は68号からの同人で、ほぼ毎号創作を発表しており、「ゆうどうえんぼく」（72号・2008・5）で宮城県知事賞を受賞した実績を持つ。今後「仙台文学」の中心として活動することを期待している。

（牛島富美二）

*「朝日新聞」は「なぜふえる同人誌（下）」欄で「『仙台文学』の創作が、こんどの創刊同人誌のなかでは、もっともすぐれていたが、私のねがう、天才的シロウトは発見できなかった。当然である。たとえば、大江健三郎のような天才的作家は、そうざらにはいるわけではない」と、小松伸六が評した。なんと大江に匹敵する作家が期待されていたのである……。

（「文芸思潮」46号／同人雑誌紹介「仙台文学」より）

歌論に「吉植庄亮」他、歌集に「観自在」他がある。また、新聞社「河北新報」は開発局長の役職で定年を迎え、仙台の大相撲準場所開催に尽力している。ただ工藤は片足が不自由で（少年時代遊び仲間達に崖から突き落とされたらしい）、杖が手放せなかった。毎号の合評会は某寿司屋の二階を利用してしたが、酒を飲んだ後で二階から下りるのに苦労しており、しばしば手を貸したことを思い出す。酒好きで、唄好きでもある工藤は、当時はカラオケもなく、地声で童謡などを唄っていたものである。

「仙台文学」創刊当初は、同人の中に発行費を一人で負担する某会社の役員がいて、他の同人たちはただ書いて発表するだけでよかったが、同人制の意義から遠慮してもらうことになった。また印刷所が同人たちの印刷資金を持ち逃げして、行方を晦まし、同人たちで印刷所へ押しかけた時には蛻の殻だったこともあった。当初発行日は不定で、五月だったり、八月だったりしたが、現在は年二回発行なので、一月一〇日と七月一〇日に固定している。これも同人が高齢化しているためかもしれない。というのも、かつて齢若かった同人たちが五、六名集まり、発行回数を増やしてもらおうとか「仙台文学」分派をつくろうとかいう動きがあった。年二回の発行は、高齢化した同人にとって、考える時間・執筆時間も十分にある。

創刊から五七年、半世紀以上も続いている。現在98号を



主宰／牛島富美二



「仙台文学」79号掲載の東日本大震災の津波を素材にした小説「黒い水」で、第6回まほろば賞を受賞した故・佐々木邦子



合評会 波奈にて
時計回りに 色川、阿久澤、柴田、石川、
牛島、酒谷、佐々木
2011年77号表紙裏

仙台文学の会

〒981・3102

宮城県仙台市泉区向陽台四丁目三・二〇

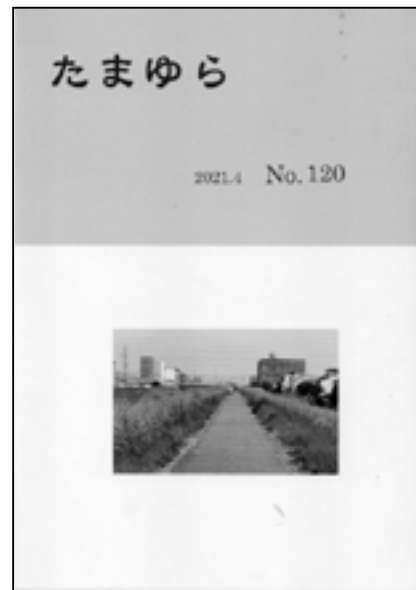
牛島富美二方

☎022・372・7891

全国同人雑誌賞 奨励賞

「たまゆら」

(京都府)



受賞の言葉「たまゆら」編集委員会 代表 中川一之

このたびは第一回全国同人雑誌賞奨励賞を賜り厚く御礼申し上げます。選考委員の方々に感謝申し上げます。文芸誌『たまゆら』は平成二年の創刊で関西でも息の長い同人誌です。小誌を立ち上げた佐々木国広氏が昨年一線から退き、新しい体制で編集委員六人が話し合いながら会を運営しています。

「たまゆら」という語句は「玉響」と万葉集にも見られる言葉で珠玉が触れ合いかな音を発するという意です。

「書きたいことを書きたいように書く」をモットーに、創作する楽しさを分かち合いながら切磋琢磨しています。響きという「たまゆら」の誌名に負けないように、今回の受賞を励みとして、同人一同さらに研鑽を積んで参ります。誠にありがとうございました。

「たまゆら」を引き継ぐ

文芸同人誌『たまゆら』は創刊三十二年目を迎えました。発行号数もこの八月で二二一号に達し、人間でいえば還暦を二回りしたといえます。

ここまで続いた原動力は前代表の佐々木国広氏の文学熱であり、冊子にまとめて世に残すという意思、そして作品を書き、互いに評し合った同人らの熱い思いです。佐々木氏は高齢ということから一一四号をもって一線から退き、一一五号からは編集委員会による新体制へ移行しました。

『たまゆら』は小説が主体ですが、エッセイ、詩、俳句、短歌、戯曲、評論、紀行などジャンルを問いません。「書きたいことを書きたいように書く」を基本的な方向性として、どんな作品でも受け入れています。同人に加わりたい場合の制限も特に設けていません。紙に印刷された文字、活字の世界で書きたい、表現したいという情熱のある人でしたら誰でも参加することが出来ます。作品の出稿についても最低限の枚数以上であればどんなスタイルで書いてもOKです。掲載の順番も決まりはありません。

「たまゆら」という語句は、珠玉が触れ合い、かなかな音を発することの意です。さまざまなバックボーンを持つ同人が自分の今の核心なるものを作品化し、それを集めたもの



第118号の月評会 板書はチューター役の佐々木前代表



第116号合評会 意見を發表中

たまゆら 新代表・中川一之
〒612-8358 TEL 075-622-3448 Mail = abbeyroad.kaz@gmail.com
京都市伏見区西尼崎町890-2 中川方

のが文芸同人誌だとするなら、『たまゆら』という誌名は、多彩な作品同士が響き合う場としての同人誌の本質を正確に言い当てているといえます。

新体制移行後は、これまで佐々木氏が原稿の添削から編集・校正まで一切の事務を取り仕切っていたのを、作者が作品に対して最終責任を持つという趣旨から、校正は最後、作者にしてもらうことに変えました。

編集作業は添削から校正、台割り、目次、その他もろもろの手数がありますが、当誌では提出された原稿を六人の委員が分担して添削し作者に返却、受け取った作者は自分で校正し委員会代表へ送付、代表は冊子に組み上げ発行する流れとしています。

現有同人の内訳は創作同人、購読同人、特別購読同人合わせて二十八人、発行は年三回です。毎号十二三人の同人から作品の提出があり誌面は賑やかなものとなっています。『たまゆら』の元気度の尺度といえるでしょう。

冊子のボリュームは一号につき一二〇から一四〇ページです。発行の都度、大阪・梅田で合評会を開いています。形式は、参加者が各作品について自分の感想や意見を思い思いに述べつつ、作者は作者で意図したことや意見感想に対する考えを話します。作者のみならず参加者全員に何がいかに気が付きがあり、創作の材料になればという意図をもつて行っています。今のところ前代表の佐々木氏にチュー

ターのな立場で議論を引っ張っていただいています。いづれでも甘えているわけにはいきません。今後は合評会の運営方法にも変更を加え、例えば事前に参加者にテーマを伝えたを絞った合評会にするなど方法を講じて行く必要があります。

同人には文芸思潮の第十四回「まほろば賞」をいただいた桑山靖子氏、「内田百閒文学賞」受賞の神原隆介氏、また「関西文学賞」「神戸エルマル文学賞」の杉本増生氏があります。他にも受賞歴のある同人が多数おり、またそれぞれに単行本の上梓もあります。

同人の居住地も都府県に広がっており、関西圏を中心に、東は茨城、東京、愛知、西は愛媛、香川、岡山と地方色豊かで、作品に色彩を与え冊子全体にダイナミズムを加えている背景だと言えるでしょう。

悩みはどの同人雑誌とも同じでしょうが新しい書き手の発掘です。フェイスブックやブログも有効な手段ですが、小誌ではなかなか人は集められていません。こんなとき全国同人雑誌協会の選考で小誌が奨励賞に選ばれたことは力強い応援を得たこととなります。事務局が置かれている文芸思潮ではエッセイ賞や銀華文学賞など各種文学賞が毎年開かれています。『たまゆら』の同人も多数の受賞者があり、そういった御縁の感慨を深くしました。全国の同人雑誌の交流や情報交換の中心的な役割を担う同協会の力を

借りながら、新しい書き手の発掘にも力を入れていきたいと考えています。

インターネットのホームページやブログに書いた小説は、紙に印刷された活字の世界とはコストも時間も何十分の一で済んでしまう手軽な世界です。ネットで発表された作品がそのまま出版というスピードも売りです。私たち同人雑誌を編む者との違いは、私見ですが、冊子にして残すというこだわりだと思います。これは前代表の佐々木氏が情熱を傾けたものと同じだろうと思います。

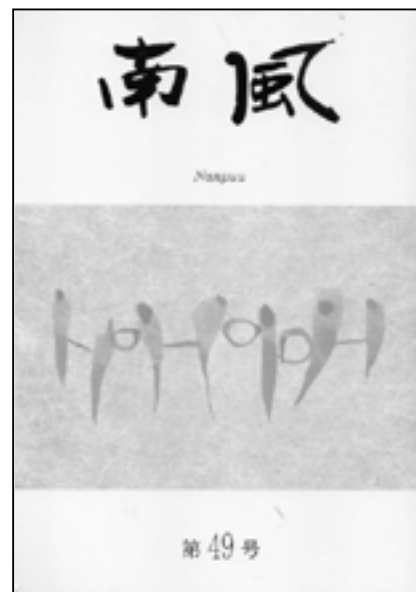
ネットと冊子、どこが違うのか。それは最後、手に重みを感じる、または手触りなのではないでしょうか。あるいは本棚にきちんと収まりそこに何が書かれてあるかわかるという視認性。ページを繰る、読む、気になる箇所を線を引く、また引用するために付箋を貼るといった作業。こうした営為が触覚という原始的な行いから人間は逃れられないものであることの証左です。ですからいつか人々はここに回帰するということを私達は信じていいのだと思います。そのことこそ人間本来の営みだと信じて同人雑誌を編み続けていきたいと思っています。

(文責・中川一之)

全国同人雑誌賞 奨励賞

「南風」

(福岡県)



受賞の言葉「南風」編集人 紺野夏子

今回、第一回全国同人雑誌奨励賞を受賞しました、同人誌「南風」です。

福岡市に拠点を置く小説を中心にした同人の会で、現在では十人で活動しています。男女を問わず常に会員は募集中なのですが、高齢化もあり、女性の作品が大半を占めて現在に至っています。

「南風」が目指すのは何よりも作品の質で、掲載できる作品かどうか、同人全員の参加により、厳しく意見を戦わせています。皆の意見を集約し、作品に反映させ掲載するレベルに仕上げるのは苦勞もありますが、それが何より今回の受賞の理由になったのではないかと拝察しています。

今回の受賞は望外のことで、選者の皆様に厚くお礼を申し上げます。

これからも一層の誌面の充実に心がけ、受賞に恥じない活動を続けたいと思っています。

「南風」の充実した例会

上列左から紺野、田中、江藤、渡邊、下列左から下園、和田、宮脇



福岡市に拠点を置く同人誌「南風」は三十年前に創刊された。創刊当時の同人は二十数名を数え、小説以外に詩や短歌や俳句やエッセイなどを掲載していたが、号を重ねるにつれて小説中心になっていき、同人も徐々に減って現在は十名である。この十名の中には遠く関東に住んでいたり、病氣療養中の者もいたりして、常時例会に集まるのは七名になっている。高齢化も進んで会の存続が心もとない今は、いつも新しい同人を募集しているが、思うようには増えない。けれども同人の少なさは小回りが利く良さもあり、年二回、春と秋に発行する「南風」誌の準備のために開く例会は月に二度行っている。同人は市内在住が殆どで、県外の一人は福岡市まで一時間かからない距離に住んでいるので、このようなやり方が可能になっている。例会の内容は主に次号掲載希望作品の下読みで、事前に各同人に送られた作品の感想を述べあい、気付いた点を指摘する。プロの作家であっても、書き終った作品は編集者の目を通して初めて出版の運びになると聞く。いわゆる「他者の目」を通すことでより完成度を上げていき、多くの読者の期待に応える作品になる。

この「他者の目」を「南風」ではそれぞれの同人が担う

「南風」



南風の会
〒 814-0014 TEL 092 - 846 - 0736 Mail = ninofn@outlook.jp
福岡県福岡市早良区弥生 2-2-8 二宮義子方



ことになる。受賞歴のあるベテランでも入会して間もない新人でも、同じように例会に提出された作品の感想を述べあう。このことにおいてはみな平等なのである。完璧に仕上げたと思っても必ず思い違いやミスや文章の不備はあり、指摘される度に「他者の目」のありがたさを痛感している。この後、それぞれ自作品を推敲して編集人が再度確認し掲載となる。

ささやかな同人誌であっても、毎号楽しみに待っていてくれるであろう購読会員やご意見やご高評をいただいている各方面に対して、より良いものを届けたいという思いでこの作業を続けている。

プロの編集者と同人誌の同人とは力量に差があるのは言うまでもないが、七人の意見を集約するとそれなりのレベルの評になり、これがある意味同人の強みでもあるだろう。

新型コロナウイルス感染の拡大で昨年から恒例だった例会後の会食はなくなり、今年に入ってから例会も開けなくなった。言うまでもなく創作は一人で行う作業なので、小説を書くのに大きな影響はない。ステイホームが続いて内省の時間が増え、より深みのある作品が出来るという意見もあるようだ。

それでも手紙や電話やメールでのやり取りでは物足りなさが残る日々が続いていたが、七月に入りようやく例会が



イラスト／岡田奉恵

出来るようになった。みなマスクをつけて集まったが、既に二回のワクチン接種は全員終わっていて、蒸し暑さもあり途中からはマスクを外した。やはり直接顔を合わせて話し合うことでより活発な意見交換もできるし、孤独な作業を続けていけばいるほど仲間とのつながりも必要になると改めて感じた。

さて、この度「南風」は五十号を迎える。書き手不足と高齢化の課題を常に抱えながら地道に号を重ね、この節目を迎えられたことは何より喜ばしい。加えて全国同人雑誌協会と「文芸思潮」からの全国同人雑誌優秀賞受賞の知らせである。これまでも「文芸思潮」には度々「南風」掲載作品を紹介していただき、日の当たることの少ない同人誌活動には大きな励みになっていた。

今回の受賞はこれまでの活動を評価していただいたと同時に、今後の活動継続への力になると確信している。

（「南風」編集人 紺野夏子）

全国同人雑誌賞 新同人雑誌賞

「文芸エム」

(滋賀県)



受賞の言葉「文芸エム」主宰 原浩一郎

半世紀近く経っているのに、ことさら思い出されるのは、息も絶え絶え文学にすがりついていた十代の日々だ。あれが私にとって変わらぬ「文学の原風景」である。そしてあの日々を噛み締めるほどに思う。

今この二〇二一年にも文学をただひとつの支えに、ようやく一日一日をどうにか生き延びている満身創痍の少年や少女たちが必ずどこかにいるはずだ。だから私は彼や彼女らの耳元でひそかに告げたいのである。たまたらずに書きなぐったその言葉が実は立派な文学なのだと。そして文学に救われている者は、文学に選ばれている者だ。少年らに限らない。誇るものなどないどころか、隠したいことばかりだったとしても、むしろ書くことはそうした持たない者のためにある。書くことで終わり、はじまることもある。

それが埋火のような切願だ。そのために「文芸エム」はどこまで行けるだろう。思いがけず高い評価をいただいた。何より本誌寄稿者の真摯な生き、書く姿勢が賞を得たのだと喜び合いたい。そして次へ進んでいきたいと思う。

投稿型同人雑誌「文芸エム」

「文芸エム」は「魂の文学」を掲げる原浩一郎の責任編集による投稿型同人雑誌として昨年創刊され、現在第四号を発行しています。固定的な同人グループは形成しておらず、季刊ごとに公開で投稿を呼びかけ、寄せられた作品から編集発行しています。

会員制の同人グループという形態をとっていない理由は、固定的な閉鎖性を嫌ったためです。創作上のきちんとした指導や相互の切磋琢磨がなければ自己満足のサークルに堕してしまいがちだと承知してはいますが、そもそも創作はするどく自分自身に対峙して営む孤独を母胎とする歩みです。濃密すぎる人間関係や集団内の権威や序列を基にした評価や助言は、創作にとって不要であるばかりでなく、みずみずしい世代の自由な感性やオリジナルな創造を阻害することもありうると考えています。そして読者に直接つながる自立したメディアとして、あえて自前の出版コードを取得しています。いわば「開かれたプラットフォーム」である「文芸エム」は、そこで作品を発表したいという創作者たちの意志がその発行を支えていると言えます。「文芸エム」が標榜している「魂の文学」とは以下のとおりです。



言葉の力／言葉の力への揺るがない確信。その力にこそ
依拠する覚悟。

世界は物語にあふれている／日常の出来事や事態が宿す
深淵で甚大なドラマへの限らない郷愁。

生は死とともにある／限りのある生の営みを死の側から
眺める畏敬の眼差し。

力のある文学／消費されるための文学でなく、深奥から
むしろ衝き動かす文学。

文学の復権／文学をしてそのいのちにふさわしく市井で
働かしめよ。

これらのテーゼは「生きる武器としての文学」と端的に
言い換えることができます。たとえ多くから冷評される作
品であったとしても、作者にとつて断然に切実な動機や背
景を秘めている作品であれば、そこに文学の核心的衝動を
見出します。「生きる武器としての文学」を確かにつかん
でいる書き手ならば、いつか読む側にとつて「生きる武器
としての文学」を提示できる可能性を宿していると考え
からず。

市井に埋もれた書き手を求め、私たちは各地で開催の「文
学フリマ」等即売会に自ら出かけて出店しています。そも
も創刊メンバーである編集委員橋元あおい、瞳元中との出
会いは盛岡、大阪で開催された文学フリマです。また誌上
で秀作を発表し続けている高梁遼夢は天津「本の市」で出

会った創作仲間です。そして新聞社などの取材に積極的に
応じ、それを広報の一助としています。

また「文学ワークショップ」と銘打った公開セミナーを
無料で開催し、これを活動の大切な柱としています。文章
力鍛錬のための実習を軸に、創作ミートインなど行つて
います。天津市の会場や全国をつなぐオンライン形式で、
これまで計八回の開催を重ねています。

寄稿者は二〇代から六〇代と年齢層も幅広く、学生、主
婦から会社員とその立場も様々です。地域も岩手、埼玉、
東京、福井、京都、滋賀、大阪、香川と全国広範囲に及び
ます。その主な顔触れは先に挙げたほかに、緊迫感のある
純烈な作風の島津耕造や淡々とした筆致で重層の実相に迫
る高田拓夢はいずれも二十代の俊才です。編集委員の月川
奈緒は映画への深い造詣をベースに清涼感のある短編を手
がけ、また林媚霊が書き上げる評論や小説は密度の濃い重
厚さが特筆されます。美しい筆力を持つ随筆畑から創作
に転じた山上この葉や失われゆく天津の風情にこだわり続
ける湖都わすれ、落ち着いた深みある文章で綴る南部里士
や臨床心理の現場から発信する阿迦井光子に、美術的感性
を詩作に込める「E」に。さらに利田充男、馬場岩ひろしや
夏巳千鶴など、それぞれの持ち味が存分ににじむ書き手た
ちです。何より、いずれも誠実に書くことに向かっており、
その真摯な姿勢が互いに刺激となっています。

津の作家 原浩一郎さん、季刊誌「



原さんは京都府の調子文化社の編集長を、創作活動の傍ら担当
「魂の文学」が「魂の文学」の編集長を、創作活動の傍ら担当
「魂の文学」が「魂の文学」の編集長を、創作活動の傍ら担当



文芸エム HAO 出版局

〒520-2134

Mail = pubstudio@gmail.com

滋賀県大津市瀬田 4-3-7-419

ところで文芸エムは会費や掲載料を設定していません。
その負担がとりわけ若い書き手の創作、発表の機会を妨げ
ることを避けたいからです。そのため活動に共感してくだ
さる方々に任意で毎号ごと発行協力として支援を求めてい
ます。編集装丁は自前で行い、少部数を随時オンデマンド
印刷してコストを切り詰めています。日頃の活動は公式サ
イトで随時公開し、寄稿者専用のBBSでは創作上の疑問
など日常的に意見交換し交流しています。本誌はネット通
販サイト等で販売しています。

同人誌といえば文芸よりも漫画アニメを指すようになっ
てから、もう随分経ちます。「文芸エム」が文芸同人雑誌
の新しいあり方としてひとつの提案となることを願いま
す。そしていつか「魂の文学」が市井から澎湃と湧き立つ
ことを思い描き、着実に息の長い活動を見据え創作に没入
しています。またこの紹介を通じて、心震わせる新たな投
稿作品が寄せられることを胸躍らせ待ちたいと思っていま
す。

(原 浩一郎)

公式サイト (投稿規定・通販サイト)

<http://pubstudio-hao.com/bungei-emu/>

投稿先アドレス pubstudiohao@gmail.com

全国同人雑誌賞 ニューウェーブ 新同人雑誌優秀賞

「前衛アンソロジー」

(愛知県)



左から長濱よし野 (旧筆名：水底燕)・幸村燕・歌猫まり／撮影者：不在

受賞の言葉「前衛アンソロジー」主宰 松原礼二

優秀賞まことにありがとうございます。『前衛アンソロジー』はサークルと個人を横断する合同誌です。雑誌創刊のコンセプトは私の兄が作りました。制作にあたっては「崩れる本棚」のPさんと幸村燕さんに多大な尽力を得ました。ゆえに私の仕事は最小限で済みました。そのほかの寄稿者十名のお力添えにもあらためて感謝致します。受賞を機に創刊の発端になり活動の拠点でもあるツイッターやnoteなどのWEBサイトと文学フリマ、そして日頃からお世話になっている古書ソオダ水、模索舎、タコシエ、BOOTH、さらには朝日新聞、中日新聞、三田文学、文藝年鑑、全作家などの精力的に文芸同人雑誌を取り上げているメディアが再度注目されることを願います。また『前衛アンソロジー3』の制作が進行中です。SFからのアプローチを模索していると幸村さんから報告を受けています。ぜひご期待ください。読み書きを生活の糧とした若い世代は確実にいるのです。

「前衛アンソロジー」の前進

僕は僕達について語る言葉を持たない。

なぜなら僕達が志向しているのは前衛であり、前衛とは己が生きてきた言葉すべての先端に立つことだからである。だから、僕らの先には未だ言葉はない。言葉はただ僕らの後ろにあるのみである。僕らは未だ来たらぬ言葉を目指して進み続ける。前衛は現れ、そしてその都度消尽する。そのような消尽のプロセスこそ前衛は現れる。

我々はそのようなプロセスのためのサークルである。

とはいえ、何も指標がないと思われても困るので、『前衛アンソロジー2 解体する文学』の序文として発表した宣言文「文学の輪廻 解体する文学の宣言」からいくらか文章を引用しておくことにする。(こちらの文章はQRコードから読める)。

「現代には見せかけのクリエイティビティが蔓延している。つまり、根底の維持を基盤とした前進(「クリエイティビティ」)が創造的なものとして賞賛されているのである。しかし、そのようなものは全くもって創造的なものではない。そのような見せかけのクリエイティビティはわれわれを未知の領域に連れていくことはなく、ただ既知の領域を引き伸ばし、拡大させるのみである。では、真のクリ

エイティビティとはどのようなものなのか。そう難しく考えることではない。答えはずっと簡単だ。真のクリエイティビティ（私はこいつを殺人犯と呼ぶのだが）は日常に溢れている。真のクリエイティビティは殺人犯は、町中、いや世界中の至る所で殺人事件を引き起こしている。その犯罪は日常に溢れ過ぎて誰も気づかないほど巧妙に行われていると言ってもいい。知らないだろうが、君だって、気づかないうちに何度も殺されているんだ。わかるかい？

つまり、あらゆるものはアルトの言うような意味で残酷なものだから、われわれは常にあらゆるものに引き裂かれ、殺害されていると言っても過言ではないということだ。確かにこの殺人事件では、一切の血は流れないし、殺された側も気づかない。しかしわれわれは引き裂かれ、解体され、焼き尽くされている。完全犯罪なのだ。犯人は誰だ？ あらゆるものだ。あらゆるものはしるしとして現れ、われわれを引き裂く。石ころでさえ、私を恐怖させる。

（略）つまり文学において、新しいものを生み出そうとするならばまず文学を破壊しなければならないのであり、真の創造的文学建設の最大の敵は文学なのである。（略）この序文はこの文芸誌のそれぞれの小説に一貫性を持たせるための、つまりはそれぞれの小説を束ねるための文章ではない。この序文はこの本における頭ではないのだ。この本においては各部分を束ねる特権的な箇所など存在しない。

このアンソロジーは常にお互いに特権性を奪い合うような闘争の空間なのである。だからこそこの序文は最大の被害者となるだろう。つまり、のちに来る文章たちはこの序文をこそ解体する殺人鬼となる。この序文はジュステイヌだ。何度も拷問され、辱められ、解体される。しかし、これこそが創造的な文学へ近づく道であり、この序文を破壊することによって創造性は生まれるのだ。われわれは差異と反復の連関の中で、文学の差異を、あるいは差異の文学を打ち立てようとするのである。このような差異と反復こそが文学の輪廻であり、文学の輪廻とは形式の輪廻であり、思想の輪廻であり、ディテールの輪廻であり、同時に読者の輪廻なのである。」

最後に前衛アンソロジーの歩んできた歴史と前衛アンソロジーの発行元である同人サークル「メルキド出版」の歴史について語ろう。メルキド出版が会員2名にて結成されたのは僕の身体を形成する液体が形を成してから5年ほど経った2004年であった。そのころの僕はといえば実家のベランダで育てられていたまだ青いトマトを齧っていたのを両親に見つけられて怒られた記憶しかなく、自分が何をしていたかもおぼろげだ。

そんな僕とメルキド出版の主催者の松原礼二さんと出会ったのは2018年の末頃で、そのころ僕がどこに出すわけでもない文章をツイッター上に公開していたところ、

松原さんから『前衛アンソロジー 何度でも何度でも新しい小説のために』へお誘いをいただいた。それから、松原さんは「前衛」という言葉を用いることへの批判などを受け、『前衛アンソロジー2』の計画を断念しようとしていたようだが、なんとしても前衛文学党を作ったかった僕は工場での夜勤明けの頭で松原さんにジュリア・クリステヴァやアントナン・アルトの文学理論と彼らの（特にアルトの）叶わなかった夢について語った（今でもあの果

てしなく長い帰路を僕は思い出せる）。そして最終的に「解体する文学」というテーマが決まり、宣言文「文学の輪廻 解体する文学の宣言」に賛同してくれた著者たちを集めて『前衛アンソロジー2 解体する文学』が作られた。現在は『前衛アンソロジー3』を計画しており、（ここで君は現在この文章を書いている僕の身体へと戻る）／まったく尻切れトンボな文章／だがそれでいい、尻尾の方は未来のどこかに投げ出されているはずだから。

（幸村燕）



左から長濱よし野（旧筆名：水底燕）・歌猫まり・幸村燕／撮影者：不在

メルキド出版（サークル名の由来はRPGの町の名前から）
設立：2004年 メンバー：2人で結成し現在は40名程
主宰：松原礼二（1975年生、愛知県出身、自営業）
発行物：マジカント、生存書簡、山羊の大学、REBOX など
〒471-0833 愛知県豊田市山之手2-12